

推薦文

絵葉書研究の更なる進化にむけた貴重な資料の共有資源化

今回の企画を見て、ここから絵葉書研究の新しい裾野が広がり、本格的な研究が生まれるだろうと思った。私自身が、日本近代の絵葉書のメディア性への驚きとともに「明治のFocus: 絵はがき論ノート」(『法政』第13巻第7号、1986)という短文を書き、手探りで「絵はがき覚書」(『風景の生産・風景の解放』講談社、1994)をまとめたときには、まだまだ基礎研究も資料の共有も足りていないことを嘆かざるをえなかつた。行き当たりばったりの暗中模索で、探し出せなかつた資料や知らないままの研究も多かつた。出版業者と卸売業者の組合がまとめた『絵画絵葉書 仕入大観』や、知る人ぞ知る収

集者であった小竹忠三郎が心血を注いだ『日本全国名所葉書目録』の訂正増補再版など、あのときは出会えなかつた資料も、今回の集成には含まれている。『ハガキ文学』誌上記事のアンソロジー『絵葉書趣味』は、いまもって国立国会図書館デジタルコレクションでは参照できないが、日露戦争前後の絵葉書流行期のさまざまな人びとの思いをうかがうことができる格好の一冊である。日本葉書会や絵葉書店の研究などを積み上げてきた向後恵理子さんが中心になって選んだと聞いたが、絵葉書研究の更なる進化にむけた貴重な資料の共有資源化の試みとして、心より推薦したい。

(さとう けんじ／東京大学大学院人文社会系研究科教授)

絵葉書というメディアにとって重要なテーマを余すことなく知らせてくれる

絵葉書は19世紀末から20世紀の視覚史を考える上でたいへん貴重なメディアである。それは、作成者の意匠、使用者の文面、そして通信省による印が一つの平面に凝縮される場所であり、「私」と「公」がいかにメディア上で交錯したかを知ることができ、なおかつ蒐集の対象として、発生初期から現在に至るまで長い歴史を持っているからである。その絵葉書の基本文献の数々がこのたびこの資料集に集められた。収録された基本文献は、それぞれが特徴を持ち、絵葉書の異なる側面を照らし出してくれる。

収められている資料について紙幅の限り触れてみよう。

『絵葉書趣味』は隆盛期の1906年に編まれた絵葉書論集であり、絵葉書について何かを論じるときには必ず参照すべきものである。絵葉書に熱狂した使用者やコレクターの感覚を知ることが、まずは絵葉書というメディアを考えるために入口となるだろう。『松村好文堂 絵葉書・額画掛軸・アルバム類出版目録』には絵葉書の資料のみならずそれを所蔵するためのさまざまな道具を読み取ることができ、コレクターの生態を伺うことができる。

絵葉書にとって重要な「旅」の問題についてさまざまなインスピレーションを与えてくれるのが、『日本全国名所葉書目録 訂正増補再版』である。絵葉書の流行は国内の鉄道網の整備と機を一にしていった。旅先で名所絵葉書を入手し、自分の訪れた景色にことばを添えて遠い誰かに宛てる行為は、旅情をいやが上にもかき立てた。また、絵葉書を手にすることによって、まだ見ぬ遠い地への憧れは高められた。では、どのような光景がこうした旅情や憧れの対象として選ばれ、流通していったのか。これは旅が、メディアによっていかに

形作られたかを知る絶好の資料である。

官によって作成された絵葉書の記録を伝えてくれるのが、『紀念絵葉書総目録 1916年8月調』および『記念絵葉書総目録 1931年版』である。紀念絵葉書と紀念スタンプの組み合わせは、日露戦争後、帰還する兵士たちを迎える、その日を紀念しようとする人々の熱狂と重なり、明治後期に爆発的に流行した。以来、戦役のみならずさまざまな博覧会や公の行事を紀念する官製絵葉書が数多く発行された。これらの目録にはその歴史の一覧が収められている。

絵葉書の始まりは「私製葉書」の始まりであり、「官」ではなく「民」によって作成された葉書の始まりでもある。『絵画絵葉書類品附属品美術印刷製品仕入大観』『日本絵画出版業組合創立二十周年記念号 組合月報』『日本絵画出版業組合創立二十五年記念集 組合月報 特輯』『回顧八十年』は民間で発行された絵葉書がどのような歴史を持っているかを知ってくれる貴重な資料群である。複数の資料にたびたび登場する東京図案印刷の黒田久吉は数々の新企画を打ち出した絵葉書史のキーマンであり、彼の回顧譚からは、作り手の側から見た絵葉書流行がどのようなものであったかを知ることができるだろう。

以上のように、この集成は、単なる絵葉書関連資料ではなく、絵葉書というメディアにとって重要なテーマを余すことなく知らせてくれる貴重な内容となっている。このような貴重な資料がひとつにまとめて発刊されることは、誠に喜ばしい。絵葉書研究者のみならず、郵便メディア、視聴覚メディアに関心を寄せる方々に広くお薦めする。

(ほそま ひろみち／早稲田大学文学学術院文化構想学部教授)

絵葉書の世界へわけいくために

向後 恵里子

絵葉書は、私たちにとってもうあまり身近なものではないかもしれない。葉書に絵をそえて消息をやりとりし、旅先の風景を送るなど、視覚的な郵便コミュニケーションはEメールやSNSで手軽にできるようになった。年賀状ですらその地位をあやしくしている。とはいえたまでも美術館で絵葉書をお土産に買ってしまうかもしれない。とくに使うあてがなくとも、コレクションとして。

20世紀初頭からほんの少し前まで、絵葉書はこうしたコミュニケーションを引き受けるとても身近な視覚メディアであつたし、ある図像をコレクションすることにうってつけの手段であった。そのじまが熱狂的なブームとともにあつたことも、よく指摘されるようになっている。このため絵葉書は、往事の世相をよく示す印刷物としての評価に加え、ビジュアル・コミュニケーションやイメージをコレクションするメディアとして注目されるようになっている。

絵葉書は小ロットから作成が可能で、小規模から経営が可能であったから、絵葉書出版産業は各地に続々と生まれた。そうした出版が、増大する絵葉書需要にこたえてきたのであ

る。しかしながら、その様相については不明な点が多い。絵葉書自体が残っていて、出版者の名が記されていても（見当たらないときもある）、誰が、いつ、どのように、といった基本的な情報もなかなかわからないことが多い。

この『絵葉書関係資料コレクション出版／流布／収集』に採録された文献は、絵葉書がどのように日常のなかに広がり、生きていたかという景色の一端を見せてくれるものである。文献は絵葉書流行の大きな渦中からはじまり、明治・大正・昭和とその時代ごとの広がりを示しながら、60年代の回顧へと連なる。この間に発行された絵葉書の数は膨大なものであつただろう。文献が語る範囲は限られたものではあるが、それらの題名にある、趣味、名所、紀念（記念）、絵画と美術といったキーワードを見るだけでも、絵葉書が扱った題材がいかに幅広く、趣味として、産業として花開いていたかがうかがえる。文献のなかの個別の事象から、絵葉書の受容と使用をめぐる状況も浮かび上がってくる。本資料集は、モノとして、メディアとして、多様な魅力をもつ絵葉書の世界へわけいくための恰好の導きとなるだろう。

(こうご えりこ／明星大学人文学部日本文化学科准教授)

郵便絵葉書関係年表……

- 1872年 近代的郵便制度が北海道を除く全国で実施
- 1873年 官製葉書発行
- 1895年 日本軍が台湾・澎湖島に野戦郵便局開設、翌96年から内地同様の郵便制度を実施
- 1900年 郵便法制定、私製葉書の印刷・発行が許可
- 1902年 最初の官製絵葉書発行
- 1904年 日露戦争による絵葉書ブーム到来



會覽博京東念記和平